

1 研究主題

心豊かな児童生徒の育成を目指して
～自己指導能力の育成～

2 はじめに

現代は様々な背景をもった児童生徒が存在する。スマホやゲームなどの通信機器でしか人と関われない子ども。自分の宿題よりも家事や子守りの手伝いを優先させられる子ども。幼少期に親から十分な愛を注がれずに育った子ども、など様々である。そのため、特定の友人としか付き合えない、些細な事ですぐにトラブルになる、我慢することが苦手ですぐに手を出してしまう等、集団生活をしていく中で問題を起こす児童生徒はどの学校、学級にも見られる。このような状況から、良好な人間関係を築き、様々な場面で適切に判断し、行動することができる自己指導能力の育成が重要であると考ええる。

3 研究経過

自己指導能力の育成を図るために、①児童生徒に自己存在感を与えること、②児童生徒の共感的な人間関係を育成すること、③児童生徒に自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること、この3点について研究に取り組んだ。

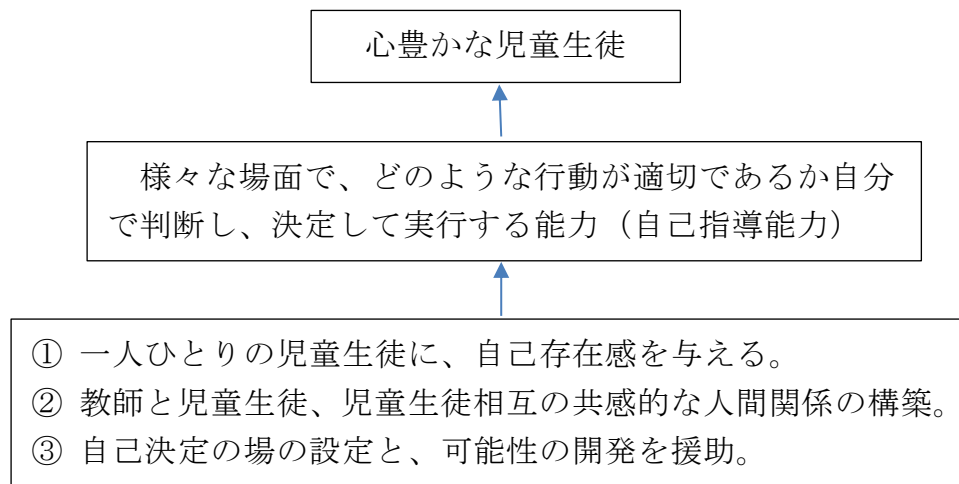
研究の方法としては、各学校における独自の教育活動（あいさつ運動やスマホ教室など）を生徒指導の観点から捉えた実践をレポート形式にまとめ、発表してもらい、その活動について小中学校の生徒指導担当が話し合い、意見交流する形で研究を進めた。意見交換をする中で、単なる取り組みに対しての評価ではなく、上記の①②③を意図的に組んだポイントはどこか。また、どうすることにより、より①②③を構築できたであろうかということに重点をおいて話し合う時間を設けた。

4 研究の概要

(1) 機能としての生徒指導

様々な教育活動を通して生徒指導を機能させる場合、児童生徒に「自己存在感」を与え、自分の行動の仕方を「自己決定」することのできる場を与えることが重要であると考ええる。そして、これらを「共感的人間関係」を基盤にして作用させているとき、自己指導能力が育成され、心豊かな児童生徒が育まれると考えられる。

(2) 研究仮説のモデル



(3) 研究内容

ア 一人ひとりの児童生徒に自己存在感を与える

複雑な家庭環境や人間関係の中で児童生徒は心の拠り所を求めている。教師の働きかけはもちろん、他学年との関わりの中で役割を与え、その働きを認めることで、児童生徒は自己存在感を感じることができる。

イ 教師と児童生徒、児童生徒相互の共感的な人間関係の構築

小学校では大縄大会やなかよしタイム、中学校では体育祭や文化祭などの学校行事を通して、児童生徒同士の人間関係つくられる。またその教師とも良好な人間関係をつくる機会にもなる。

ウ 自己決定の場の設定と、可能性の開発を援助

学校行事だけでなく、日々の学級活動において、児童生徒に適切な役割を与える。自分たちで考え、行動させて適切な評価をする。自己決定、成功体験を繰り返し経験させることにより、責任をもって行動することができるようになる。

5 今後の課題

それぞれの学校の取り組みについて、生徒指導の観点から捉えることで、児童生徒の心や行動に変化が見られ、学校生活に対して前向きな姿勢を見せるようになることが分かった。各学校は取り組みを行うだけではなく、どの視点を重視して活動を行っていくのか、また、教師が児童生徒にどのような声かけやアプローチをすればいけないのかについて、考え深めていかなければならない。取り組みを行い、意見を交わすことで上記の①②③が生徒指導を機能させる上で重要な役割を担っていることを明確にすることができた。

しかし、取り組みについて単発的に終わってしまうことが多く、継続して行った場合の児童・生徒の変容について見ていく必要があるように思う。取り組みを行って、どの位置に終着させていくことが大切なのか、また発達段階でどれくらいできると良いことなのか、研究を深めていく必要がある。